

---

## 序 文

愛媛県上浮穴郡美川村（現、久万高原町）上黒岩、通称ヤナセに所在する上黒岩遺跡は、1961年5月に地主の竹口渉・義照さん（当時、美川中学校1年生）父子が発見、同年10月に3日間、江坂輝彌（慶應義塾大学文学部）・岡本健児（小津高校、高知女子大学文学部）・西田栄（愛媛大学教育学部）の諸氏が小発掘したところ、押型文土器の時期の埋葬人骨に遭遇した。縄文早期までさかのぼる人骨となると神奈川県平塚、新潟県室谷につぐ全国でも3例目といってよい発見であったから、そのニュースはただちに、「7, 8千年前の人骨を発掘」の見出しで全国の新聞に登場した。そのときはヤナセ遺跡の名称であったけれども、翌1962年7月の第2次調査のときから上黒岩遺跡に改められ、「押型文土器発掘」、「最古の土器片も」から「岩ハダから壁画発見」、そして、「小石に1万年前の女性像」の見出しで石偶の発見を報じられた。こうして、上黒岩遺跡によせる学界の関心はなみなみならぬものになっていった。

上黒岩遺跡は、その後、1962年10月に第3次調査、とんで1969年8月に第4次調査、1970年10月に第5次調査が前記の諸氏に小片保（新潟大学医学部）氏らを加えて実施された。

当時の新聞記事のスクラップブックを読み返してみると、1958年の新潟県小瀬が沢洞穴と長野県神子柴遺跡、1960年、63年の長崎県福井洞穴、1961年、62年の上黒岩遺跡、1962年～1964年の日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会による全国の洞穴遺跡の発掘調査と、今でいう縄文草創期の遺跡・遺物の発見ラッシュは、新聞の3面を飾る考古学の話題の明らかに中心の位置を占めていた。こうした動きは、1967年の『日本の洞穴遺跡』の刊行で一応の終了をみた。思えば、1950年代末から1960年代前半の時期は、縄文文化の起源に迫る新資料が次々と世に出た大発見時代であった。山内清男氏が縄文早期の前に「縄文草創期」を設定することを提唱したのも、この時期のことであった。

福井洞穴や上黒岩遺跡の発掘成果を収録した『日本の洞穴遺跡』の多くは概報を集めたもので、上黒岩遺跡の報告は第3次調査までであった。しかし、概報であっても関係者の間には報告は一応済ませたという、なんとなく安堵感を与えたのであろうか。その後、第4次、第5次調査が実施されたけれども、膨大な発掘品をみた上黒岩遺跡の正報告は刊行されないまま今日に至ったのである。しかしながら、草創期で唯一の石偶、多数の有茎尖頭器、隆起線文土器などの出土、早期に属する多数の人骨の出土など上黒岩遺跡の価値は早くから認められ、1971年には国の指定史跡となっていた。

学界への詳細な報告はなかったけれども上黒岩遺跡のもつ魅力は、研究者層の世代交代がすすみ研究状況が変化した後も、失せることはなかった。綿貫俊一（大分県教育委員会）は1993年から美川村に通い有茎尖頭器などの石器の実測をすすめ、兵頭勲（当時、愛媛県歴史文化博物館）は押型文

---

---

土器の調査をおこない、その成果を2001年に公表していた。小林謙一（当時、慶應義塾大学非常勤助手）もまた隆起線土器の調査をおこない、その概要を1994年に報告していた。

その一方、国立歴史民俗博物館には石偶3点、有茎尖頭器5点、土器2片など計16点の遺物が文化庁から管理替えされて館藏品となっており、これらの資料に関心をもっていた編者には管理責任者の1人としてなんらかの形で公表を義務づけられているように思えた。

しかしながら、第5次調査が終了してからすでに30年余りたち、当時の調査関係者は高齢化し、あるいは死去し、報告書作成の機運もなく、その刊行は望むべくもなかった。このような状況をなんとか打開すべきだとの、上黒岩の資料につよい関心をもちつづけている諸氏の熱意に後押しされて、編者を代表として報告書を作成しようという声があがった。しかし、地元と慶應義塾大学、新潟大学および国立歴史民俗博物館に分散保管されている大量の出土遺物の調査研究を進めその結果を印刷公刊するには、担当の困難とかなりの費用が予想された。

そこで報告書作成に必要な費用のすべてを国立歴史民俗博物館が負担し、この重要な遺跡の報告書を作成刊行するという計画をたて、国立歴史民俗博物館の共同研究として申請したところ、幸い、承認をうけることができた。こうして、2004年度から2006年度までの3年間、出土遺物の調査、現地の測量など再調査を実施して、ここに報告書を上梓することが可能になった。

報告書の刊行にあたり、まず1961年から1970年までの5次におよぶ発掘調査を遂行された江坂輝彌、西田栄、岡本健児、小片保、森本岩太郎、小片丘彦ほかの調査関係者の諸氏に敬意を表したい。そして、上黒岩遺跡の遺物を管理し調査を許された久万高原町（旧、美川村）、慶應義塾大学民族学考古学研究室、愛媛県歴史文化博物館、新潟大学医学部、国立歴史民俗博物館の関係者に感謝したい。共同研究に結集した執筆者はそれぞれ本務をもっており、けっしてよいとはいえない条件のもとで、よく力を尽くされた。上黒岩遺跡の調査成果を現時点での水準で学界に提示できるようになったことを執筆者の諸氏に感謝したい。

最後に、地元の美川村（現、久万高原町）で発掘調査の円滑な進行を陰で支え、長い間報告書の刊行を待っておられた当時の関係者に、本報告書をお届けする日がきたことを研究代表者として何にもまして嬉しく思っていることを記しておきたい。

2009年3月

国立歴史民俗博物館共同研究  
「愛媛県上黒岩遺跡の研究」代表  
春成秀爾